

A decorative border with a repeating floral and vine motif surrounds the text.

典集成

萬 葉 集

四

青木生子 井手至 伊藤 博
清水克彦 橋本四郎 校注

新潮社版

新潮日本古典集成 (第五五回)
萬葉集 四



定価 一九〇〇円

昭和五十七年十一月五日 印刷
昭和五十七年十一月十日 発行

校注者

青木生子・井手至
伊藤博・清水克彦
橋本四郎

発行者

佐藤亮一

印刷所

大日本印刷株式会社

発行所

株式会社 新潮社

〒六、東京都新宿区矢来町七
電話 東京 03 (二六六) 五・・ (業務)
東京 03 (二六六) 五四・・ (編集)
振替 東京 四一八〇八

装画 佐多芳郎
組版 シーティエス大日本
製本 新宿加藤製本

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

凡例	三
----	---

卷第十三	三
------	---

卷第十四	八五
------	----

卷第十五	一五三
------	-----

卷第十六	二二九
------	-----

解説

萬葉集の世界(四) 萬葉集の歌の場	二七五
-------------------	-----

萬葉集の生いたち(四) 卷十三、卷十六の生いたち	二七
--------------------------	----

付録

参考地図	三八
------	----

萬葉集 卷第十三

雜歌

三二、三三、三四

三

相聞

三四八、三四九

三六

問答

三四九、三五十

三

譬喻歌

三五一、三五二

三〇

挽歌

三五三、三五四

三

萬葉集 卷第十四

東 歌

雜

歌

上総 かみつよ の国の歌	四八
下総 しもつよ の国の歌	四九
常陸 ひたち の国の歌	八八
信濃 しなの の国の歌	八九

相

聞

遠江 とほづあふみ の国の歌	八九
駿河 するが の国の歌	九〇
伊豆 いづ の国の歌	九三
相模 さがみ の国の歌	九六
武蔵 むさし の国の歌	九八
上総の国の歌	一〇〇
下総の国の歌	一〇三
常陸の国の歌	一〇四
信濃の国の歌	一〇五
上野 かづの の国の歌	一〇六
下野 しもつ の国の歌	一一〇

陸奥むつの国のくにの歌 四六〇、四六八 一一〇

譬喻歌 遠江とほづあそみの国のくにの歌 四〇九 一一一

駿河すまがの国のくにの歌 四〇〇 一一二

相模さかひの国のくにの歌 四〇一、四〇三 一一三

上野かみづのの国のくにの歌 四〇四、四〇六 一一三

陸奥むつの国のくにの歌 四〇七 一一四

いまだ国かみを勘かんへぬ歌 *

雑歌 四〇八、四一四 一一四

相聞 四一五、四一六 一一九

防人歌 四一七、四一八 一二八

譬喻歌 四一七、四一八 一五〇

挽歌 四一七 一五二

萬葉集 卷第十五

天平八年丙子ひのえねの夏の六月に、使を新羅しらきの国に遣つかはす時に、使人等、おのおの別れを悲しびて贈答ぞうたふし、また海路うみぢの上にして旅を憫いたみし思おもひを陳のべて作る歌、并あはせて所に当りて誦詠しやうえいする古歌 一百四十五首

別れを悲しびて贈答する古十一首 *	五八六	一五五
しましく私家 いへ に還りて思 おも ひを陳 の ぶる歌二首	五八九	五八
発 た つに臨 のぞ む時に作る歌三首	五九〇	五九
船に乗りて海に入り、路の上にして作る歌八首	五九四	一六〇
所に当りて誦詠する古歌十首	六〇〇	一六一
備 もとめ 後の国の水調 みづうづ の郡 こほり の長井 ながゐ の浦 うら に船泊りする夜に作る歌三首	六〇三	一六五
安芸 あき の国の風早 かぜはや の浦 うら に船泊りする夜に作る歌二首 *	六〇六	一六六
長門 ながと の島にして磯辺 いそへ に船泊りして作る歌五首	六一〇	一六七

長門の浦より船出する夜に、月の光を仰ぎ観て作る歌三首……………
古挽歌一首 并せて短歌……………
三六三―三六四 一六八

反歌一首……………
三六五―三六六 一六九

物に属きて思ひを発す歌一首 并せて短歌……………
三六七―三六九 一七〇

反歌二首……………
三六八―三六九 一七一

周防の国の玖河の郡の麻里布の浦を行く時に作る歌八首……………
三六〇―三六七 一七二

大島の鳴門を過ぎて再宿を経る後に、追ひて作る歌二首……………
三六八―三六九 一七五

熊毛の浦に船泊りする夜に作る歌四首……………
三六〇―三六四 一七五

佐婆の海中にしてたちまちに逆風に遭ひて漂流し、豊前の国の下毛の
郡の分間の浦に着きて、艤難を追ひて怕みして作る歌八首……………
三六四―三六九 一七六

筑前の国、筑紫の館に至りて、本郷を遙かに望み、懐憤ひて作る歌
四首……………
三六五―三六九 一七九

七夕に天漢を仰ぎ観て、おのもおのも所思を陳べて作る歌三首……………
三六九―三六七 一八〇

海辺にして月を望みて作る歌九首……………
三六九―三六七 一八二

志麻の郡の韓亭に至りて作る歌六首……………
三六七―三六九 一八四

引津の亭に船泊りして作る歌七首……………
三六四―三六八 一八六

肥前の国の松浦の郡の粕島の亭に船泊りする夜に、海浪を遙かに望み、
おのもおのも旅の心を憫みして作る歌七首……………
三六八―三六七 一八八

老岐の島に至りて、雪連宅満のたちまちに鬼病に遇ひて死去にし時に作

る歌一首 并せて短歌

反歌二首

葛井連子老が作る挽歌一首 并せて短歌

反歌二首

六鱗が作る挽歌一首 并せて短歌

反歌二首

対馬の島の浅茅の浦に至りて船泊りする時に作る歌三首

竹敷の浦に船泊りする時に、おのおの心緒を陳べて作る歌十八首

筑紫を廻り来て、海路にして京に入らむとし、播磨の国の家島に至りし時

に作る歌五首

中臣朝臣宅守、

蔵部の女孀狭野弟上娘子を娶りし時に、

勅して流罪に断じ越 前の国に配す。ここに夫婦、

別れやすく会ひかたきを相嘆きて、おのおの働

む情を陳べて贈答する歌 六十三首

別れに臨みて娘子が悲嘆びて作る歌四首

別れに臨みて娘子が悲嘆びて作る歌四首

三六八〇 三六九〇 一九〇

三六八〇 三六九〇 一九一

三六九一 三六九三 一九二

三六九一 三六九三 一九三

三六九一 三六九三 一九四

三六九一 三六九三 一九五

三六九一 三六九三 一九六

三六九一 三六九三 一九七

三六九一 三六九三 一九八

三六九一 三六九三 一九九

三六九一 三六九三 二〇〇

三七三三 三七三六 二〇一

萬葉集

卷第十六

由縁有る
雑歌

中臣朝臣宅守、道に上りて作る歌四首……………三〇三

配所に至りて中臣朝臣宅守が作る歌十四首……………三〇四

娘子、京に留まりて悲傷びて作る歌九首……………三〇八

中臣朝臣宅守が作る歌十三首……………三一〇

娘子が作る歌八首……………三一二

中臣朝臣宅守がさらに贈る歌二首……………三二五

娘子が和へ贈る歌二首……………三二六

中臣朝臣宅守、花鳥に寄せ、思ひを陳べて作る歌七首……………三二七

二の壮士、娘子、桜児を誂ふに、桜児、林の中に入りて死にける時に、お

のもおのも心緒を陳べて作る歌二首……………三三二

三の壮士、娘子、縋児を娉ふに、縋児、水底に沈み没りぬる時に、おのも

おのも所心を陳べて作る歌三首……………三三三

竹取の翁、たまさかに九人の神女に逢ひ、近づき狎れぬる罪を贖ひて作る

歌一首 并せて短歌

三九、一三九
三四

反歌二首

三九、一三九
三七

娘子らが和ふる歌九首

三九、一三九
三八

娘子、竊かに壮士に交接りける時に、親に知らせまく欲りしてその夫に送

り与ふる歌一首

三八、一三八
三〇

壮士、年累ねて遠き境に赴き、還り来りし時に、娘子の姿容疲羸せるを見

て口号ぶる歌一首

三八、一三八
三一

娘子、夫君の歌を聞き、声に應へて和ふる歌一首

三八、一三八
三二

壮士、娘子の親の呵嘖はむことを悚惕りける時に、娘子、壮士に贈り与ふ

る歌一首

三八、一三八
三三

葛城王、国司の祇承緩怠にして意悦びずありし時に、采女、觴を捧げ

て詠む歌一首

三八、一三八
三三

男女集ひて野遊する時に、鄙人、その婦の美しき貌を賛嘆する歌一首

三八、一三八
三四

寵び薄れて寄物を還さえし時に、娘子が怨恨むる歌一首

三八、一三八
三五

娘子、夫と相別れて、裏物のみを贈らえし時に、還し酬ふる歌一首

三八、一三八
三六

夫君に恋ふる歌一首 并せて短歌

反歌

三八、一三八
三七

或本の反歌

三八、一三八
三七

壮士、娘子の改適せることを知らずしてその父母に贈る歌一首……………三八四

答ふる歌一首……………三八五

穂積親王、酒酣にある時に好みて誦む御歌一首……………三八六

河村王、宴居にして琴を弾きてまづ誦む歌一首……………三八七―三八八

小鯛王、宴居にして琴を取りてまづ誦む歌二首……………三八九―三九〇

児部女王が囁ふ歌一首……………三八二

古歌一首……………三八三

惟野連長年、古歌を説きて、決むる歌一首……………三八三

長忌寸意古麻呂が歌八首……………三八四―三八五

饌具、雑器、狐声、河橋等の物に關けて作る歌……………三八四

行膝、蔓菁、食薦、屋梁を詠む歌……………三八五

荷葉を詠む歌……………三八六

双六の頭を詠む歌……………三八七

香、塔、廁、屎、鮎、奴を詠む歌……………三八八

酢、醬、蒜、鯛、水葱を詠む歌……………三八九

玉掃、鎌、天木香、齋を詠む歌……………三九〇

白鷺の木を啄ひて飛ぶを詠む歌……………三九一

忌部首、数種の物を詠む歌一首……………三九二

境部王、数種の物を詠む歌一首	三八三	二四六
作主の詳らかにあらぬ歌一首	三八四	二四七
新田部親王に献る歌一首	三八五	二四七
佞人を諂る歌一首	三八六	二四八
右兵衛、荷葉に閑けて作る歌一首*	三八七	二四八
無心所著の歌二首	三八八―三八九	二四九
池田朝臣、大神朝臣奥守を嗤ふ歌一首	三八四〇	二五〇
大神朝臣奥守が報へて嗤ふ歌一首	三八四一	二五一
平群朝臣が嗤ふ歌一首	三八四二	二五一
穂積朝臣が和ふる歌一首	三八四三	二五一
黒き色を嗤咲ふ歌一首	三八四四	二五二
答ふる歌一首	三八四五	二五二
戯れて僧を嗤ふ歌一首	三八四六	二五三
法師が報ふる歌一首	三八四七	二五三
夢の裏に作る歌一首	三八四八	二五四
世間の無常を厭ふ歌二首	三八四九―三八五〇	二五四
藐孤射の山を思ふ歌一首*	三八五	二五五
海山に寄する歌一首*	三八五	二五五

瘦人を嗤咲ふ歌二首	二八五
高宮王、数種の物を詠む歌二首	二八六
夫君に恋ふる歌一首	二八七
恋の歌二首	二八八
筑 前の国の志賀の白水郎の歌十首	二八九
玉に寄する歌一首	二九〇
和海藻に寄する歌一首	二九一
千鳥に寄する歌二首	二九二
草に寄する歌一首	二九三
男女の問ひ答ふる歌一首	二九四
豊 前の国の白水郎の歌一首	二九五
豊 後の国の白水郎の歌一首	二九六
能登の国の歌三首	二九七
越 中の国の歌四首	二九八
乞食者が詠ふ歌二首	二九九
怕ろしき物の歌三首	三〇〇

凡 例

本書は、現代の読者に最も読みやすく親しみやすい『萬葉集』を提供する目的で編集したものである。萬葉研究史一千余年の成果を慎重に踏まえながら、おおよそ次の方針に基づいて通読と鑑賞の便宜を図った。

〔本文〕

一、萬葉歌の原文はすべて漢字で記されているが、本書では歴史的仮名づかいによる訓み下し文（漢字仮名交り文）とし、原文は割愛した。ただし、難訓箇所は原文のままとした。また、序文・前文などの漢文も、すべて書き下し文とした。

一、訓み下し文は、現存古写本を検討し、先学の諸説をも考え合せたうえ、最も妥当と認められる形を選択した。校注者の見解に基づいて訓んだ部分もある。

一、訓み下しにあたって二通り以上の訓みが考えられる場合は、上代語の性格を逸脱しない限り、いづれかの訓みで統一した。

（例）

吾大王

ワガオホキミ
ワゴオホキミ

↓ 我が大君

一、固有名词などで二通り以上の表記が見られる場合は、原則としていずれかの表記で統一した。

(例) 泊瀬・長谷 ↓ 泊瀬

忍壁皇子・忍坂部皇子 ↓ 忍壁皇子

一、漢字は新字体を用い、異体字は現代通行の字体に改めた。

一、漢字にはできるだけ多く振り仮名をつけるよう心がけたが、本文の訓みを限定できない場合は省略した。

(例)

目頼四吾君

メヅラシワガキミ
メヅラシアガキミ

↓ めづらし我が君

また題詞や左注などで、音読、訓読、いずれとも判定できない語句についても省略した場合がある。

一、歌の句間を各一字分あけて記した。

一、各歌に付したアラビア数字は、『国歌大観』の歌番号である。

〔頭 注〕

一、頭注は、本文や参考文献から引用する場合を除き、現代仮名づかいに拠った。

一、標題、題詞、左注についての注は、各語句、もしくは各文章ごとに注番号をつけて示した。ただし、文学性を帯びた題詞・左注や、歌の前後にある詩文は、その全文を口語訳したうえ、色刷りと